



**Data**

監督：デヴィッド・リーチ  
 原作：アントニー・ジョンストン  
 『ザ・コールデスト・シティ』  
 (オニ・プレスグラフィック  
 ノベル)  
 出演：シャーリーズ・セロン/ジェ  
 ームス・マカヴォイ/ソフィ  
 ア・ブテラ/ジョン・グッド  
 マン/トビー・ジョーンズ/  
 ジェームズ・フォークナー/  
 サム・ハーグレイブ/エデ  
 ィ・マーサン

**👁️👁️ みどころ**

シャーリーズ・セロンがMI 6の女スパイに扮して、『マッドマックス 怒りのデス・ロード』（15年）とは異質のものすごいアクションに挑戦！

ド派手な『007シリーズ』も『ボーンシリーズ』も良いが、やっぱりスパイ映画は東西冷戦の時代がシリアス。しかも、そこに“ベルリンの壁崩壊”という歴史的事実が絡めば、より重厚に。

その場合の難点は、スパイたちの相関図とストーリーが難しくなることだが、さて本作の工夫は・・・？



**■□■シャーリーズ・セロンがまたまたすごい役に挑戦！■□■**

シャーリーズ・セロンはハリウッドビューティを代表する美人女優だが、『モンスター』（03年）では、大幅に改造した肉体で連続殺人犯を怪演してアカデミー賞主演女優賞をゲットした（『シネマルーム6』238頁参照）。私はその大胆な挑戦にビックリしたが、近時の『マッドマックス 怒りのデス・ロード』（15年）では、女戦士インペラトル・フュリオサに扮して、苛酷な肉弾アクションに挑戦！同作「いつの時代？どこの舞台？誰と誰が何のために戦っているの？」等を曖昧にした、近未来、世紀末をテーマにした映画だったが、砂漠の上を疾走する様々な改造車の上で繰り広げたシャーリーズ・セロンのアクロバットのアクションはものすごいものだった（『シネマルーム36』232頁参照）。

そんなシャーリーズ・セロンが、本作ではまたまた、イギリスのMI 6が誇る女スパイ、ロレーン・ブロートン役に挑戦！もっとも、その原作は2012年にオニ・プレスグラフィックノベル・シリーズから発売されたアントニー・ジョンストンの『ザ・コールデスト・

シティ』だと聞いた時、本作は近時ハリウッドで大量生産されている荒唐無稽で漫画的なアクション？一瞬そう思ったが、本作の時代は東西冷戦時代、そして、舞台は1989年に本当に物理的に崩壊してしまった東西ベルリンの壁があったベルリンだ。その時代のスパイ映画の最高傑作は、リチャード・バートン主演の『寒い国から帰ったスパイ』（65年）だが、本作はそんなシリアスなスパイものではなく、窮地からの脱出、情報収集、戦闘の能力に長けたMI 6の女スパイ、ロレーン・ブロートンに扮したシャーリーズ・セロンのアクションものだ。

## ■□■女の格闘技なんて知れたもの？イヤイヤさにあらず！■□■

近時、『ジョン・ウィック』（14年）（『シネマルーム37』77頁参照）に続いて、『ジョン・ウィック：チャプター2』（17年）が公開された。このシリーズは、キアヌ・リーブス扮するジョン・ウィックの「ガン・フー」と呼ばれる、カンフーと空手などの武術と銃撃を融合させた本格的な格闘技（殺人技）が焦点だった。他方、『英国王のスピーチ』（10年）（『シネマルーム26』10頁参照）でジョージ6世役を演じた英国紳士の代表ともいべきコリン・ファースが、MI 6のスパイに扮して華麗なアクションに挑戦したのが、『キングスマン』（14年）だった（『シネマルーム37』213頁参照）。しかして、シャーリーズ・セロンは本作でいかなるアクションを？

もっとも、いくらシャーリーズ・セロンがアクション映画に挑戦しても、彼女は所詮女。女優主体のアクション映画には、日本では志穂美悦子が主演した映画や、中国では楊紫瓊（ミシェル・ヨー）が主演した映画、タイでは美少女“ジージャー”ヤーニン・ウィサミタナンが主演した『チョコレート・ファイター』（08年）（『シネマルーム22』173頁参照）等々があり、それなりの迫力と魅力があるが、所詮女。私は毎年大晦日に放映される「KYOKUGEN」や「ボクシング」、そして、女性版格闘技「RIZIN」を楽しみながら見ているが、それらを見ていると、男と女の格闘能力の差異は明らか。それは、将棋の世界における男女のレベル差と同じように大きいものだ。したがって、本作でいくらシャーリーズ・セロンがすごいアクションに挑戦してもたかが知れたもの。私はそう思っていたが、いやいやさにあらず、冒頭のバスタブのシーンで彼女が見せる美しい背中の筋肉は・・・？

ちなみに、『キネマ旬報』11月上旬特別号の「リターンズカラダが目当て」で秋本鉄次氏はそれを絶賛し、「たった今、『アトミック・ブロンド』を本年度洋画ベストに決定」とまで書いているので、本作では何よりも、血まみれ傷だらけになって奮闘するハリウッドビューティ女優シャーリーズ・セロンのアクションに注目！

## ■□■東西ドイツの分割とは？ベルリンの壁とは？■□■

本作をきちんと理解するためには、①第2次世界大戦後、敗戦国であるドイツが東ドイ

ツと西ドイツに分割されたこと、②それにもかかわらず、ドイツの首都であったベルリンは東ベルリンと西ベルリンに分割統治されたうえ、境界線上には東ドイツが「ベルリンの壁」を築いたことを理解する必要がある。

パンフレットには、「ベルリンの壁」の解説があるので、参照してもらいたい。また、東ドイツと西ドイツの位置関係、及びベルリンが東ベルリンと西ベルリンに分割統治された位置関係も、パンフレットに解説があるので、こちらも参照してもらいたい。

## ■□■暗躍するスパイたちは？複雑な人物相関図は？■□■

スパイ映画の代表作は今まで24作も続いている「007シリーズ」だが、そこでも「シリアスなスパイもの」にするのか、それとも「ド派手なアクションもの」にするのかの選択がいつも迫られている。その選択の必要性はあらゆるスパイ映画で不可欠だが、本作はシャーリーズ・セロンを前面に押し出したアクション性とシリアスな社会性の二兎を追っているから、その演出は難しい。

さらに、本作の時代はもっともシリアスな東西冷戦時代、そして、舞台はベルリンの壁がある東ベルリンだから、そこで暗躍する多数のスパイたちの所属やキャラは当然複雑になってくる。その代表はイギリスのMI6と東ドイツの国家保安省シュタージだが、そこにアメリカの中央情報局CIA、ソ連の国家保安委員会KGB、さらにはフランスの対外治安総局DGSEまで絡んでくるから、その人物相関図はややこしい。その内容はパンフレット等によって、あなた自身の目でしっかりと！

## ■□■ストーリーも複雑！その前編だけ紹介すると・・・■□■

アクション性とストーリー性の二兎を追った本作は、人物相関図とともにストーリーも複雑。公式ホームページ、パンフレットにストーリーがあるので、参照してもらいたい。

ただし、これは「前編」だけ。なお、パンフレットでも「ネタバレ注意！鑑賞後にお読みください」と注意書きされた「後編」は、パンフレットのラストに載せられているが、それはここに転載できないので、本作ではパンフレットの購入が不可欠だ。

## ■□■スパイ・リストは誰が？壁の崩壊は誰が？■□■

本作はMI6のチーフであるC（ジェームズ・フォークナー）と諜報局主任であるグレイ（トビー・ジョーンズ）からの「ベルリンで何があった？」との質問に対して、ロレーンが答えていく形で進んでいく。しかし、前述した通り人物相関図とストーリーが共にややこしいので、その理解は難しい。しかし、ストーリーのポイントがベルリンで流出したスパイ・リストであることがすぐにわかるから、その危険性の大きさから生まれる緊張感はずいぶんある。なお、本作では西側と東側のスパイになる男たちの区別はわかりにくいですが、フランス対外治安総局（DGSE）の美人スパイ、デルフィーヌ（ソフィア・ブ

テラ)は目立つので、目の保養は彼女を中心にしっかりと……。このように、本作ではスパイ・リストは誰が?というテーマをめぐって展開していくが、同時にベルリンの壁の崩壊という歴史的事実が東ドイツの民衆のデモ隊によって実現していく姿が登場するので、それにも注目したい。

スパイ・リストが外部に漏れたら多くの協力者が死ぬことになる。それ自体はわかりきったことだが、それほど価値のあるスパイ・リストであれば、それを入手したスパイはそれをそのまま上司に渡すの?それとも……。?そこらの騙し合いをポイントとして、本作後半のストーリーはあなた自身の目でしっかりと。

さらに、本作ラストには何度も死地をさまいながらしぶとく生き残ったロレーンが、何とも意外な形で、意外なところに登場し、目にも止まらぬ早撃ちアクションを魅せるので、それに注目!しかして、本作ラストの決めゼリフは「早く家に帰ろう」だが、そのセリフはいかなるシチュエーションで語られるの……?

2017(平成29)年10月30日記